

---

beyond the seventh bridge

ぱる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

beyond the seventh bridge

### 【Nコード】

N1114Z

### 【作者名】

ばる

### 【あらすじ】

そこは要塞都市キューウエル。

傭兵のジルはそこで平穏な日常を過ごす筈だった。

ああ、何て美しい人だろう。

真正正銘の姫君だ。居るんだなこんな絵に描いたような皇族の姫君…。

まさかその出会いが波乱の始まりだったなんて思いも寄らなかった。

うっかり腹黒い人物に弱みを握られ、それでも健気に任務を全うす

るジルの明日はどっちだ？

要塞キューエルを舞台に傭兵ジルと姫君Wと周囲の人々を巻き込んだ、波乱の日々を描きます。

## 01 (前書き)

こちらでの初投稿です。 >br<  
色々試しながらポチポチやって行きますm( )  
| ( ) m

切り立った崖に吹き上げる風が頬を颯る。  
空には遠く猛禽の滑空が霞んで見える。

要壁の乾いた石畳を靴音を響かせて行くと、その女性は呼び掛けるまでもなく振り向いた。

要壁の向こうを眺めて居た視線がゆっくりと此方を捉える。

ああ、何て美しい人だろう。

ひたと鉢合わせた視線を外せずに某然と見詰め返してしまう。

背は自分と同じ位だろうか、濃紺のビロードに金の刺繍を施したドレスを纏い背筋の伸びたその佇まいは育ちの良さを現していた。

殆ど色味のない白金の様な麗髪。

汚れのない白い頬に珊瑚のように淡い紅色の唇。

瞳は灰色掛った冴えた蒼。

真正正銘の姫君だ。居るんだな、こんな絵に描いたような皇族の姫君……

「あなたが私の護衛？」

不躰なまでに見詰めて居たら、思わぬ具合に不機嫌そうな、少しハスキーな声が響いた。

我に帰って慌てて跪く。

「大変失礼致しました。私が姫君の護衛に当たります赤北軍指揮官付き部隊長ジル・ウイケッドと申します。以後よろしくお願い申し上げます。」

「要らないわ。軍の護衛なんて。腕の立つ侍従を連れて居るし、何よりもあなたは正規軍ではないでしょう？選りによってどうして傭兵なんかを護衛につけるのよ。」

挨拶もそこそこに、麗しの唇から拒絶の言葉が紡ぎ出される。  
けれどそんな事は慣れていた。

正規軍でない傭兵の身分では身につける衣装がまるで違うのだ。この要塞ではこの歳にして古株の自分だが、正規軍になれないのは理由がある。

これまでに何度もその事で辱めを受けてきたのだ、今更驚きはしない。

相手が生粋の皇族なら尚更だろう。

我知らず口元に笑みが浮かぶ。

だからと言って荒んでいる訳ではない。

傭兵の身分のままにして部隊長を務める自分の経歴に自負もあるのだ。

「申し訳ございません。私もこれが任務にてお言葉に従う事はできません。何卒ご容赦くださいませ。」

それだけ言つと反論の間を与えずに姫君の背後へ回り込んで控える。視線で追われている事は重々承知の上だ。

「私は殿方が嫌いなよ。それにあなたみたいな若輩の護衛なんて役に立たないわ。身近に居ると思うだけで寒気がするの。」

追い討ちをかけるように言葉が追ってきたが、笑顔のまま首を振る。「その事でしたらご心配には及びません。私の事は居ないものと思つて下さつて構いませんし、そうであれば尚更、私以上に姫君の護衛に適した者は他に居りません。また皇族の方に護衛を付けぬような事はこの要塞ではあり得ませんので、どうかご辛抱を。」

最後の言葉が一番効いたのだろう、姫君はむすつと口を引き結ぶと黙り込んだ。

そんな仕草も絵になるなどと感心していたら、其処へ甲高い声が響いた。

## 02 (前書き)

短いつすがボチボチで…。

今回はiPhoneから投稿してみる。

「此方においでだったのですね！」

慌てた様子の二十歳前後の侍従が息を切らせて掛けて来る。

余程慌てたのか、結った薄茶の髪がほつれて風に良いように流されている。

「探しましたよ。一人で行動しては駄目だと、あれ程申し上げましたのに……。」

近くまでやってくると、息を切らせて上気した頬を怒りの表情で一層染めて言い募る。

と、そこで視線が此方に据えられる。

「あ、と……。何方ですか？」

姫君の間に割って入るように進み出る。

腕の立つ侍従とは彼女の事なのだろうなどと、その動作を観察しながら朗らかに笑顔を向ける。

「この要塞で姫君の護衛を仰せつかりました、ジル・ウイケッドと申します。姫君の侍女の方でいらっしゃいますか？どうかお見知りおきを。」

隙の無い姿勢で侍従は睨み付ける。

言った言葉には反応を見せずに、後ろの主を振り向かずに問う。

「ジル様、この者の言う事は本当ですか？」

ジル？私と同じ名？

多少驚いて侍女らしき人物と目を合わせた。

深い青い瞳が拳動の一つも見逃すまいと据えられたままだ。

「エリサ、その者の言う事は本当だ。この要塞キューウェルでは皇族が軍の護衛なしで居られる筈もない。この者を拒んだとて別の者が付くだけだ。仕方がない、諦めた。」

そして、侍従の背から前へ進み出ると真直ぐな視線を寄越して言い放つ。



「これは私の侍女でエリサと言う。今迄もこの者一人で近衛も充分だったが、キューウエルは要塞だ、仕方が無い。あなた一人なら了承しましょう。私の名はジル・エス・ヴィークと言う。図らずもあなたと同じ名、これも何かの縁かも知れない。よろしく頼みます。」

皇族とは皆この様な者か……。歳若い姫君でも支配者の威厳をひしひしと感じる。いや、血筋なもんか……。

深々と頭を垂れて礼を取ると、応えを口にする。

「承知致しました。姫君と同じ名とは恐れ多うございます。私の事はウイケッドとお呼びくださいませ、ヴィーク様。」

### 03 (前書き)

大分間空いちゃった(汗)  
とにもかくにも続き!

「おおーい！ジル！」

宿舎に入る手前で遙か後方の遠くから声が聞こえる。

振り向いてみれば、要壁に等間隔に配置された物見の塔の上から、金髪の青年が親し気に此方へ向かって手を振っている。

「また…彼奴は要壁の内側を監視して何やってるんだか…。あれじや大声で“サボってます”と周囲に宣言している様なもんじゃないか。」

何事もないかのように視線を前方へ戻すと一瞬滞った歩みを再開する。

「そう思うなら手でも振ってやれよ。」

連れ立って歩いてきた仲間のセズンが苦笑して呟く。

思わず大きな溜息が零れた。

「何言ってるんだ。ああ言うシユタインに手なんか振ってみろ、持ち場放り出して飛んで来るに決まってる。そう思うなら無視して素早く視界から消えてやるのが公私共に一番だ。」

話しながら何事もなく宿舎の扉を潜る。

背中にシユタインの悲痛な叫び声を浴びたが、完全に無視してだ。

「ははは…。そうかもな。彼奴も懲りないな。」

セズンはそのまま宿舎入り口直ぐに設えられた食堂に席を取ると、正面の席を促す。

その指図のままに腰を下ろすと見計らったように目の前にお茶が差し出される。

「ジル、本当に遅いんだね。昼食くらい時間に食べる訳にいかないのかい？例の姫さんは随分人使いが荒いんだね。」

見上げれば茶を差し出した厨房を取り仕切る年嵩の女性が、笑み掛けながら隣に座る。

昼の多忙な時間を過ぎた食堂は人も疎らで余裕が窺える。

「ああママ。いや、至って温厚な方だよ。只、余り不特定多数の人間を傍に置きたくないらしいから、単独警護をする事になったんだ。だから単に私が昼食の時間を警護対象の安全な時間へずらしているだけなんだ。この時間は自室で過ごされる習慣らしいから、断って出てきてるんだ。」

そう言っている間に目の前に昼食が運ばれる。

時間にしたらもうお茶時で、昼食と言うには遅すぎる時間なのだが。「それにこの時間だと、昼は忙殺のマリーンとゆっくり話しながら優雅に美味しい食事が上げ膳据え膳だ、良い事尽しじゃないか。」  
ジルがマリーンと呼んだ壮年の女性は親しみやすい笑い皺をその顔に刻んで笑顔を作るとジルの頭を撫でた。

「また可愛い事を言ってくれるね、この子は。任務に忠実なのも良いけど、自分の身体は粗末にするんじゃないよ。」

その表情は母親のようで、マリーンが特別にジルを可愛がっている事は一目瞭然だ。

「解った、ママ。ありがとう。夜は部屋に送ったら任務終了、朝までは廊下に護衛が付くし、要塞の中に居る分には楽な任務だよ。あ…今日のメインは雷鳥のローストじゃないか。美味しそう。」  
それだけ答えると、これ以上待てないとばかりに食事を頬張る。

ここ要塞キューウエルの軍食は美味で有名なのだ。

それもこれも、このマリーンの腕によるものであると要塞の人間なら誰もが知って居る。

男ばかりの要塞、軍属の徒の誰よりも遅しい、マリーンは此処に暮らす者全員の母の様な存在なのだ。

「しっかりと食べ。夕食はジルの好きなシチューだから、楽しみにしておいで。」

それだけ言つと頷くジルの正面に座るセズンへ目配せしてマリーンは席を離れて行った。

その姿を目で追っていたセズンは溜息混じりに零す。

「あーあ。良いなジルは…。」

「何？何で？」

モゴモゴと食事を頬張りながら聞き咎める。

「鬼の料理長、マリーンが優しいのはジルにだけだよ。昼食の時間に遅れたら、他の奴なら問答無用で食事抜きだぜ？」

「うまつ！…ああ、それなら私が頼んだから…任務の都合…だから…。」

手を止める事なく咀嚼の合間に答えると一層深い溜息が返る。

「それが聞き届けられるのが特別って事さ。」

そんな事言っただって、任務なんだから仕方ないって。じゃなきゃ毎日昼飯抜き？それはない、絶対。

視線だけを苦笑に歪めて返すが、食べる事に夢中で返事をするのも億劫だった。

頭で反論はしても、今は飢餓感を埋める事の方が優先だった。

「うむ、それよりも、どうだった？前後で変化はあった？」  
セズンへ本題を振る。

食べながら正面へ視線をやるとセズンが背筋を伸ばす。

「そうでした。各所に配した者達からの通達ですが。」  
言葉も改まる。

「出入りは特に怪しまれるものはありませんでしたが…。」  
「が？」

最後の一口を飲み込んで促す。

「偉く目立つ貴族の子息が、後を追うようにキューウェルへ向かっている、との情報が入っています。」

「それって…。」  
「まあ、目的は芳しくありませんが、想像通りのようで、どうしたもんかと…。」

「あ…：やっぱり？解った。じゃあ、名前だけ聞いとく。そっちはこつちで何とかするから、引き続き警戒を怠らないように。一応ボスに報告を。」

「解った。…なあ…：ジル。やっぱ要人警護を一人じゃきつくかないか

？」

セズンが言い辛そうに切り出した。

「ま、言われるだろうとは思ってたけど。」

「あー、まあ単独だと色々心配だよな。ヴィーク様の要望で私一人きりと言われてしまったからなあ。」

そこまで口にするるとセズンの表情が一層暗くなった。

拙いな。セズンは心配性だから、話が大きくなる前に説き伏せないとは。

呼吸を整えると姿勢を正す。

「ま、あれだ。要塞内の警護なら問題ないだろうから条件飲んだんだ。それ以外は限りじゃない。ボスにも許可はとったし、解ってるよ。それにご本人も此処での護衛の意味を理解されてる、話しの通じない方ではないから大丈夫だ。心配掛けて済まないな。」

意識して晴々とした笑顔を向けて労うと、セズンは納得したように安堵の息を吐いて頷いた。

「心配掛けて悪いな。今回は他に要員が居ないから、代わりにその間部隊の面倒の方を頼む。」

## 04 (前書き)

明けましておめでとついでいます。

今年が皆様にとって良い年でありますように。私も何やかんやと頑張りつゝ！

更新のんびりですが、気長によろしくですm ( ) ( ) m

セダムと昼食を取りながらの手短な情報交換を終えて、一通りの要  
点の確認をして食堂を後にした。

宿舎を出て直ぐにセダムとは別れて、真直ぐにヴィークの自室へと  
足を向ける。

あれだけ美しいお方だから、帝都から求婚者が追ってきても不  
思議はないが、余り野暮な事はしたくない…まあこれも任務の内か。  
自分の装備を思い浮かべて確認する。

「一応、対応できるだけの物はある。明日はもう少し装備を変える  
か…。」

考え事をしながら歩いていると不意に腕を掴まれた。

「わっ！」

驚いて咄嗟にその手を返し相手の腕を捻じり上げる。

「いたたたたっ！待ってっ待って！俺！」

眼前上方には金髪の後頭部、必死に首を巡らせて此方を見ようとす  
る横顔はやはりと言うか、うんざりする程見慣れた者だった。

「解ってる！気配殺して近づくな！質が悪い！！」

思わず怒鳴る。

「悪い、悪かったって。もうしない、しないから放して。腕痛い！

！！」

また心にもない事を……。

その腕を更に捻って悲鳴をたっぷりと聞き届けてから開放する。

「痛いなーもー。」

涙声で腕を摩る姿は一見哀れだが、そんな姿を冷やかに流し見て身  
構える。

案の定、振り向く相貌は満面の笑みだ。

「良い加減懲りろ！シユタイン。」

「えー。だって気配消さないと近付けないしいー。声掛けたけど、



さつきも無視したじゃん。なのに、いつつも…」

「お前に構ってる暇はない。」

軽く頭痛のしそうなシュタインの空け振りに、いつも通りの無視を決め込もうと言葉を切って捨て足を進める。

「あつ待って！ジル！」

追い縋るシュタインを横目に構わず突き進むと、右に左にと位置を変えながら視界に入ろうと付き纏って来る。

あーもー！何時もながらうざったらしい！

仕方なく歩を止める。

「シュタイン！うざい！」

金切り声を上げると、シュタインは叱られた仔犬のように眼前に正座する。

けれどその顔は『待ってました』と言わんばかりに輝いている。

金髪の少し伸びた天然パーマがくるくると柔らかさそうで、その前髪の間に見く瞳は若葉色をして期待に輝いていた。

あーもう！いつつもこの流れだよ。面倒だったらない！

意識しなくても眉間に皺が寄る。

目の前の青年は自分より体格も歳も格付けすら上なのに、何時もどうしてこんなに自分に構いたがるんだろうかと腑に落ちない。

まるでそんな威厳は感じさせないけれど、シュタインと言うこの男は正規軍にあつてキューウェル要塞の第一師団長を務める手練れなのだ。

帝国の主要要塞であるキューウェルの第一師団長といえばエリート中のエリート、将来を約束され、家柄・実力を伴った者のみか手にする階級だ。

正規軍にすら入れない傭兵である自分とは月とスッポン、身分も大きく違う。

それがどう言う訳か出会った初日から、毎日毎日判で押したように変わらずに絡んで来るのだ。

「シュタイン…ボスに呼ばれたんだろ？こんな所で油を売っている

と余計に叱られるよ?」

その言葉に少なからずシュタインの顔色が青褪める。

「やな事言つなよ。どうせ叱られるんだ。出来るだけ後の方が良いに決ま…。」

「これ以上邪魔すると、任務に支障ありってボスに駄目押しするけど?」

シュタインのともでも理論に付き合っている暇はない。

言葉を遮って告げると目の前の瞳が潤んだ。

「解ったよ。解ったから、ハグさせてくれよ。ね?そしたらボスんとこ行くからさ。お願い!」

一度だけだと人差し指を立てての懇願だ。

そう言われて『はいどうぞ』と答える訳ないだろう。気色悪い! そう言つてやるうかと思つたら目の前が真っ暗になった。

身体が持つていかれる。

上体の圧迫感に続いて頭上に大きな溜息が掛かる。

「ジルをハグしないと死ぬ。一日一回はこうしないとマジで死ぬ。」

「ちよつ。訳の解らん事言つてないで放せよ!こつちの意向を聞く気も無い癖に!毎度訳もなく抱き付くな!気色悪い!!」

何時もあの手この手でバリエーション豊かに、必ず一日一度は抱き付いて来るのだ。

本日は返事待ちの間の強襲か!

すかさず両足で地を蹴って頭突きを食らわせる。

そして緩んだ腕を掴んでシュタインの二の腕の下に肩を入れて上体を倒す。

「せいっ!」

苦もなくシュタインの身体が浮き上がる。

「れっ?」

間抜けな声の次の瞬間にはシュタインの身体が石畳にどつと打ち付けられて悲鳴が上がる。

強かに背を打ったシュタインは後頭部を両手で抑えて転げ回る。

「いててっ！」

「嫌だと言ってるだろう！」

「俺だつてやだよ。ハグできなきゃだ！減るもんじゃなし、ジルのケチ！」

涙目で訴えられて余計に腹が立つ。

「結局何時も嫌だと言つても聞きやしない。自分勝手な奴は大っ嫌いだ。」

言い捨てて、横たわったシュタインの邪魔な足を蹴ると捨てて行く。

「痛！蹴らなくなつて良いだろっ！ジルのケチ、乱暴者！」

「誰のせいだ、馬鹿！」

背後の声に振り向かず反論を叫ぶ。

追つてこられては困るので足を蹴つたのだ、流石にシュタインも任に着いてしまえば邪魔はしないと解っているから、その場を逃げるように駆け出したのだ。

本当に時間無いつて言うのにつ！シュタインの相手は私の任じゃないぞ。断じて！！

そうしてやつとの思いで辿り着いたヴィークの自室、扉の前で呼吸を整える。

お待たせしてしまつたかも知れない。

心を沈めて声を上げた。

「失礼致します。ウィケッド、戻りましてございます。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1114z/>

---

beyond the seventh bridge

2012年1月6日02時46分発行